

書 評

手塚 章・呉羽正昭編：ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ。二宮書店、2008年4月刊、182p., 3,000円（税別）

アメリカ発の金融・経済危機の情報が瞬時に世界中に広まり、国や地域を越えて株価暴落や経済不安を引き起こしている様は、世界経済の一体性や金融（マネー）を通じた各国経済の国境を越えた強い結びつきを実感させる。こうした結びつきは、見方を変えると経済活動を通じた国境を越えた地域間結合の一形態とも解釈でき、少なくともその可能性を連想させる。その一方、グルジアでの紛争をはじめとする地域紛争は、政治・経済・民族間対立を背景とした政治的空間の分離が今日的課題であることを認識させる。

地理学において地域や空間の結びつき（空間結合）や空間分離に関する理解は重要なテーマであり、これまでも論じられてきたが、その多くが国を基本とする政治・経済協力や、新興経済地域の形成といったテーマを扱うものであった。しかし、1990年代初頭の東西対立の終焉以降、世界的な（グローバルな）規模で社会経済構造が急速に転換し、国家や政治体制という枠組みを超えた地域間結合が現実世界において主要テーマとなる中で、国境を越えた地域間連携に関する研究や著書が地理学でも数多く見られるようになった。

本書は、ヨーロッパ連合（EU）の国境地域を対象として文化的・社会的・経済的な結びつきの進展を現地調査に基づいて明らかにしており、地域間結合の実態を具体的に理解することのできる好著といえる。とくに1980年代半ば以降の「国境なきヨーロッパ」への取り組み、またその結果としての地域変容の姿が主にドイツとフランスの国境

地域の事例調査に基づいて議論されている。執筆者は編者の手塚と呉羽をはじめ地理学分野において第一線で活躍する内外の8名であり、本書はこれらをメンバーとして2001年～2002年度と2005年～2007年度にかけて実施された文部科学省科学研究費による共同研究の成果を基にまとめられている。

主に扱われる地域はアルザスとロレーヌ両地方である。両地方は普仏戦争や第1次世界大戦時における領土争いの対象となった地であり、市村（2002）をはじめ歴史学や人類学的視点から各地方の地域性（独自性）の形成過程を扱った著書も多い。そうした著書や研究とは異なり、本書では紛争や国境という空間摩擦などの歴史的背景をふまえつつも、現在進行している両地方の空間的結合や分断を実例に則して明らかにすることが主眼とされている。

構成は、導入部として本書のテーマと対象地域の概観に触れる「序論」のほか、「第1部アルザス地方」と「第2部ロレーヌ地方」となっている。このうち第1部は「第1章アルザス－フランスの周辺からヨーロッパの中心に－」、「第2章多国籍企業の立地展開と地域経済」、「第3章アルザス地方の言語問題－地域言語の展開と現状－」、「第4章ストラスブール－国境都市からトランスボーダー都市へ－」、「第5章バーゼル都市圏と越境地域連携」からなる。第2部は「第6章ロレーヌ－重工業からヨーロッパ統合へ－」、「第7章ロレーヌ地域における産業転換過程」、「第8章グランドリジョン（Saar-Lor-Lux 国境地域）における人口流動」、「終章統合ヨーロッパにおける国境地帯の将来と課題」という構成である。

まず、序論において編者の一人である手塚はア

ルザスとロレーヌにおいて地域間結合や地域連携を議論する意義を次のようにまとめている。本書で扱う両地域はフランス北東部に位置し、ベネルクス3国からドイツ・フランス・スイスの国境地域にまたがる「ヨーロッパ中軸国境地域」に含まれる。これら地域では政治的境界としての国境に加えて、言語をはじめとした文化的・社会的・経済的境界が複雑に交錯し、これらが障壁となり、経済的ポテンシャルが高いにもかかわらず、経済発展が不十分な状態である。このため現在進行中の地域統合の動きが今後の経済発展を占う上でも重要である、としている。

続く第1部では、アルザスでの調査に基づいて地域間結合の実態が明らかにされる。序論の議論を引き継ぐ形で、第1章でもアルザスの位置づけが検討されており、当地方がフランスという国家レベルでの最周辺部の位置から、EU統合やグローバル経済の進展によってヨーロッパ経済の中心部に隣接した中心性を備えた地域となった点が確認される。ただし、域内では経済格差が現に存在しており、こうした経済格差は新たに発生した中心性を活かした経済発展に基づいて解消されるべきであり、そのためには資源管理や交通計画などにおいて国境を越えた統一的な地域計画や制度の構築が求められるとされる。

それでは国境を越えた統一的な制度とは、具体的にどのような形態がありうるのか？第2章においては、地域経済動向と関連させながら外国籍企業の進出を分析することにより、アルザスにおける民間ベースでの地域間連携が概説されている。この中でアルザスでは外国籍企業の進出が活発である点が明らかにされており、こうした傾向はヨーロッパ中軸地帯に位置するという立地位置の優位性のほか、積極的な外資誘致政策とも関係していると指摘されている。第3章はアルザス語という地域言語の形成過程と利用実態の分析を通じ

て、言語という文化的側面から地域間交流の特徴が明らかにされている。著者によれば、フランス国内における少数地域言語の中でもアルザス語は相対的に保持されているとされる。その理由として言語的にドイツ語との親和性の高いことを背景として、人的な地域間交流が活性化の中で逆に言語の有用性が高まった点が指摘されている。

第4章では、ライン川沿いに位置するストラスブールに着目して、都市計画を中心とした法的・社会的制度における国境を越えた地域連携の具体例が示されている。1990年代にストラスブールでは、都市整備の核として「ストラスブール・ケール軸」構想が策定され、EUの補助金などを得て公園整備等の共同事業が推進されるなど、公的主体間での協力関係が強化されている。こうした中で、都市計画や地域計画といった従来は国や地域の社会的・法的枠組みで構築されていた制度が国境を越えた行政体との連携に配慮し、それらを通じて相互発展を主眼とした制度へと変質している現状が示されている。地域間連携に参画する主体が自治体間のみではないことは、第5章のスイスを含めたドイツ・フランスの3か国にまたがるバーゼル都市圏の事例から明らかにされている。国境を越えた地域連携(著者の表現では「越境地域連携」)の実態が連携主体に着目して議論されており、バーゼル都市圏での越境地域連携では、制度的に国や州・県・地域レベルにおいて重層的な組織が形成され、自治体のみならず企業や個人などが担い手となっているのである。

第2部ではロレーヌでの国境を越えた地域連携のあり方が示される。第6章ではロレーヌの全体像が大局的に議論されており、歴史的な地域変遷、工業や都市と農村の変化といった考察がなされる。この地域が産業構造の変化や交通環境変化に伴って、重工業地域という性格からヨーロッパ統合の中核地域へと変化しつつある点が強調され

ている。こうした言説と連動して、第7章ではロレーヌでの鉱工業の衰退と産業転換が論じられている。その中で、鉱工業衰退に伴って採用された産業転換政策ではロレーヌのヨーロッパ中軸地帯への近接性や、交通の要衝に位置する点が注目されており、こうした利点を活かす形で自動車や物流拠点の形成などが図られていることが事例を通じて明らかにされている。

こうした産業転換政策は必ずしも全ての地区で成功するわけではなく、労働力の一部は国外へ流出している。第8章は、ドイツ・フランス・ルクセンブルク・ベルギーにわたるグランドリジョン（ザール・ロル・ルクス国境地帯）に着目して、国境を越えた人口流動を通勤、買い物、観光の3側面から考察している。とくに通勤流動においては、ルクセンブルクは低い失業率や高賃金などを背景としてロレーヌなどから多数の労働者を通勤者として吸引していることが示されている。終章においては、これまでの議論に基づきながら EU を中心とした統合ヨーロッパにおいて国境地帯が抱える課題と将来像が簡潔にまとめられている。

以上のように、本書はアルザスとロレーヌという国境地帯を対象として、丹念な現地調査にもとづいて文化的・社会的・経済的な側面からみた地域間結合や地域連携の実態をまとめている好著といえる。現在ヨーロッパで進行している地域変化の実例を丁寧に調査し、数多くの図表を用いて具体的に議論を進めており、その資料的価値のみならず、学問的価値を率直に高く評価したい。とりわけ、複数の事例地域内において主要テーマが設定され、多様な側面から地域結合や地域連携の姿を理解できる点を評価する。

ただ、こうした多様な側面からの議論は両地域の共通性と差違を考察し、また、現在におけるヨーロッパの他の国境地帯と比較する上で、逆に読者の視点を拡散させてしまう危険性がある。願

わくは、アルザスとロレーヌ両地域を統一した項目で比較する箇所を設けて両者を比較することを通して、より明瞭に拡大 EU における国境地帯の変化や、国境を越えた地域連携のあり方を議論して欲しかった。「序章」と「終章」において全体を見渡した考察がなされているが、可能であれば共通の項目（人口などの社会属性や経済特性）を比較する部分があっても良かったのではないだろう。

いずれにせよ、本書を通じて EU 拡大の中で進展する国境を越えた活発な人的・物的・経済的交流や情報交換、また、行政や民間企業による地域連携の実態を広く理解することが可能である。EU やヨーロッパ各国をフィールドもしくは研究対象とする研究者はもちろんのこと、教育、行政に携わる方々にも是非ともお勧めしたい一冊である。

（伊藤徹哉）

文 献

市村卓彦 (2002) : 『アルザス文化史』人文書院。

中西僚太郎・関戸明子編 : 『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版、2008年11月刊、195p.、2,600円（税別）

「古地図は、大地に刻まれた人間の歴史の記録であるとともに、それぞれの時代の人間が、どのように世界をとらえてきたかという世界観ないしは世界認識の反映であるといえる」。織田武雄がその著書『地図の歴史』の冒頭で掲げた上記の言葉を借りるならば、本書は近代という時代、さらにはその時代に生きた人々の世界認識を鳥瞰図、民間地図、古写真を通して解明しようとした意欲作である。